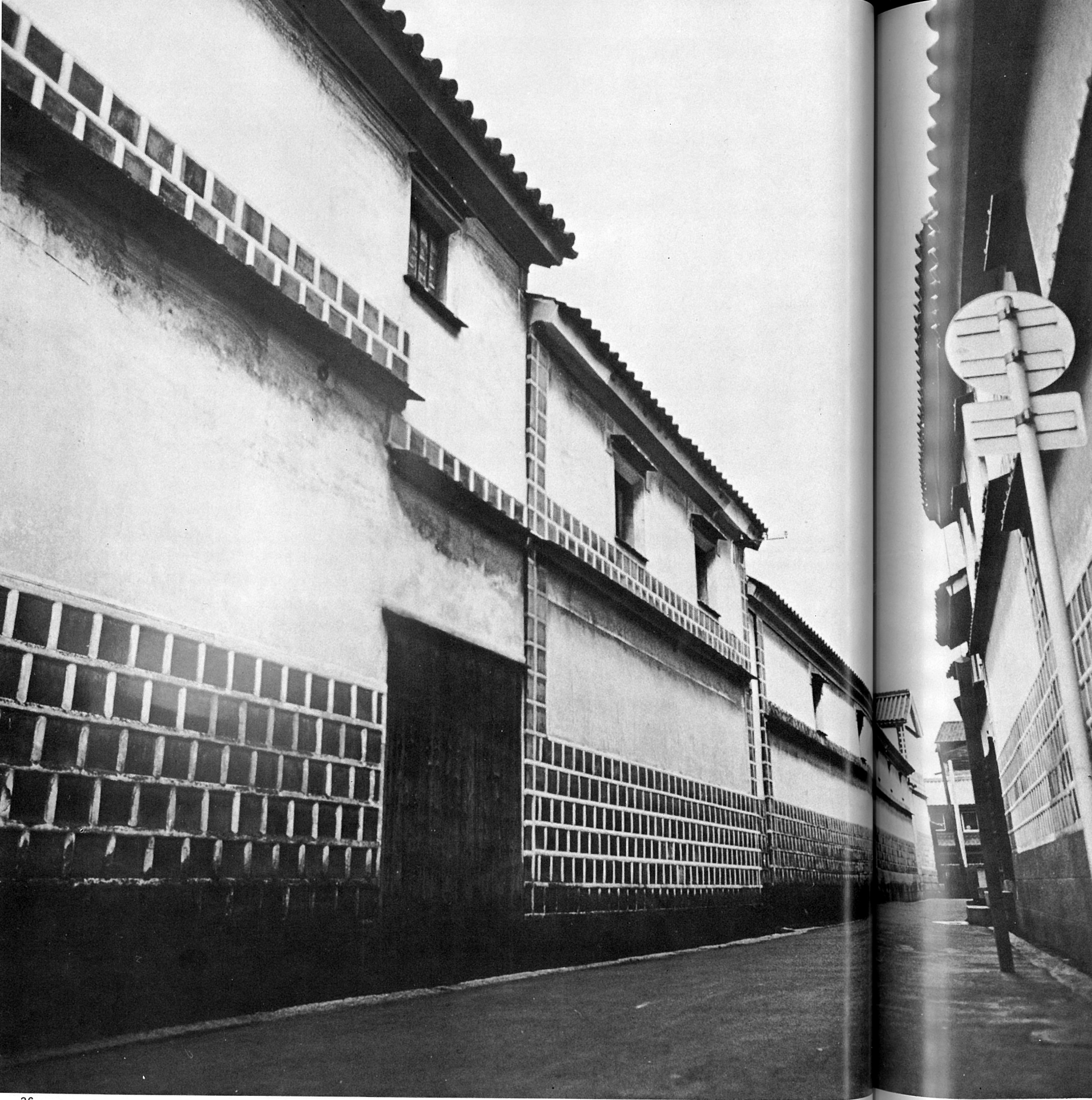




36



37

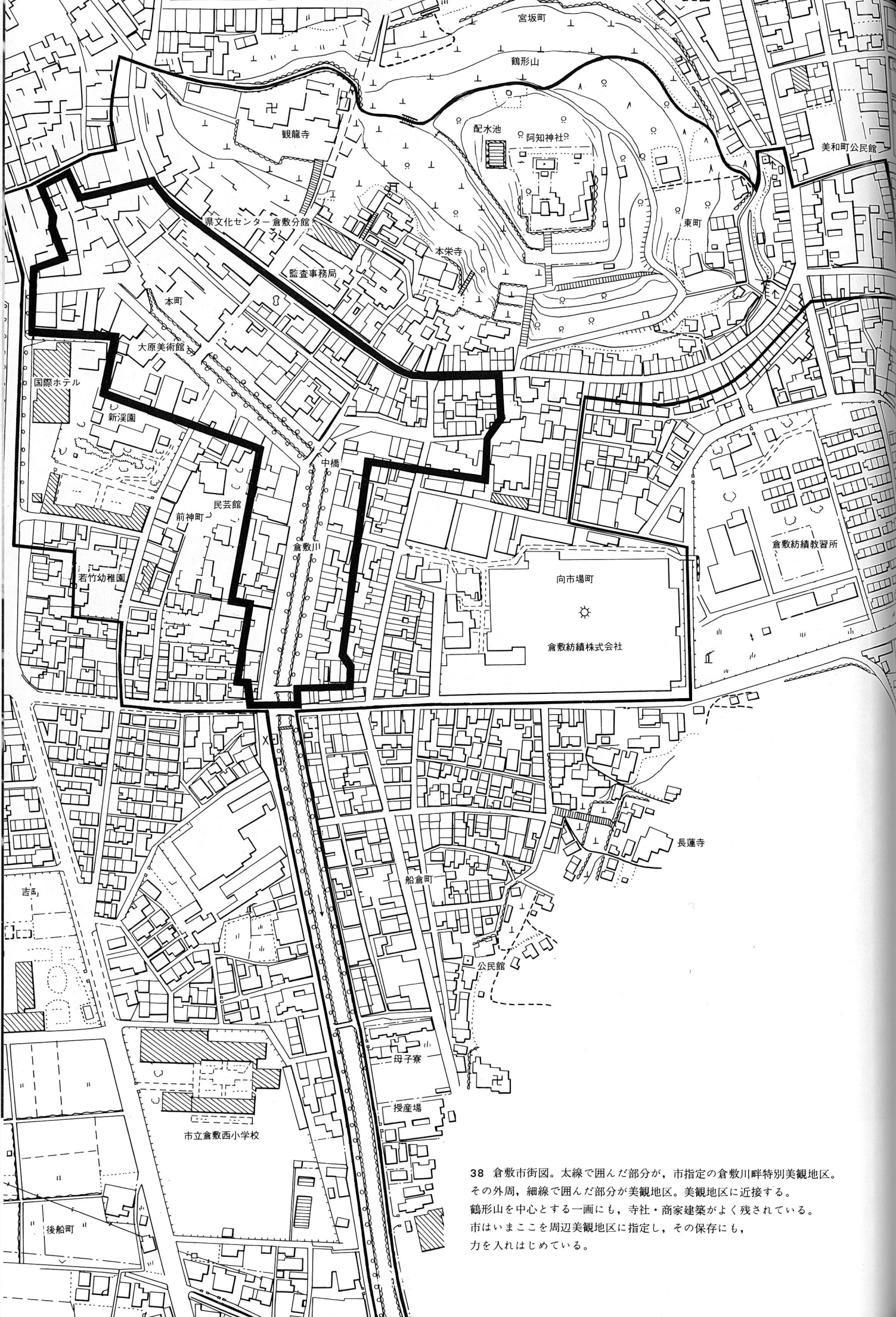
倉敷

倉敷は、茶人大名で知られる小堀遠州ゆかりの地。備中松山城主でこの地の幕府代官もつとめた遠州が、大阪冬の陣のさい、ここに陣どって、兵糧米を集めて徳川方に送りだし、その縁で天領となって豊かにひらけてきた町である。いまでも往時の蔵米輸送の動脈をつとめた運河——倉敷川の界わいに、黒い瓦と白壁の倉屋敷群が立ち並び、商港として栄えた昔をしのばせている。

しかし倉敷はまた、歴史地区の保存的再開発に、時代に先駆けてとりくんできた町でもある。それは大原美術館に代表されるような国際的視野で地方の町の文化をとらえてゆく、創造的な努力のなかに織りこまれてきた。このような町の性格はサイン類にも反映して高山・妻籠に比べかなり現代的に複雑な要素が含まれてきている。しかし第1印象として感じられるのは、記号系サインは必要最少限度にコントロールして、建築物と環境にとけこませようとする強い志向性である。かわりにシンボリックに訴えかけてくるのが、白壁と黒い瓦の倉屋敷群の感動的な美しさ。——いわばここでは倉屋敷自体が、1種のサイン建築化しているといえなくもない。

36 倉屋敷群のそこここにあふとひらける路地に、倉敷情緒はひとときは濃くたどよう。ナマコ漆喰の腰瓦は倉敷独特の様式で、白壁にその黒白のパターンが映える。

37 倉敷川のほとり、ゆるる水面に影おとす、白壁と黒い瓦の町並み。夏は柳がみごとである。191本のこの川畔柳は、河岸や橋、川辺の石灯籠などとともに、市の保存記念物となっている。



38 倉敷市街図。太線で囲んだ部分が、市指定の倉敷川畔特別美観地区。その外周、細線で囲んだ部分が美観地区。美観地区に近接する。鶴形山を中心とする一画にも、寺社・商家建築がよく残されている。市はいまここを周辺美観地区に指定し、その保存にも、力を入れはじめている。



39



40

39 倉敷川畔でもしにせの旅館・くらしきのファサードとサイン。道標風の石柱の上に、アクリルの行灯看板。デザインも文字も芹沢銈介氏。石柱に彫られた文字「右」は入口の指示。灯ともす頃、打水のあとがすがすがしい。
40 倉造りをそのまま店舗とした民芸品店・倉の看板。



41

41 倉敷は珈琲文化の町でもある。旅館くらしき経営の新しい喫茶店・珈琲館。破損の進行していた隣家の商家を買取り、外観を復原改修して、内部だけを現代クラフト調の喫茶室に改造している。設計・浦辺建築設計事務所。



42



43

42・44 文化施設のサイン。記号系サインを目立たせないための配慮は、とくに公共系に強い。42 倉敷民芸館。44 大原美術館。

43 倉敷代官所跡にたつ、赤レンガの明初の工場建築・倉紡第1号工場。いまは倉紡記念館となり、万博・繊維館の展示物が引越している。裏庭には例の、横尾忠則氏の大看板も余生を送っている。扉上部に刻まれているのは、大原家の紋章。

45 大原美術館別館の出口。いちばん新しい東洋館棟である。扉の紋章がきいている。

46 大原美術館別館の、中庭を囲む倉屋敷群に、1棟だけ紅殻塗りの赤い倉があり、若い観光客たちの人気を集めている。これが染色館というのもおもしろい。デザインは芹沢銈介氏。4〜5年前に登場した。沖縄などにも魔除けのためか、赤い倉があるという。その民俗的根拠と、建築カラー化時代を先取りしたような今日の感覚の結びつきが興味深い。



44



45



46



47

- 47 倉敷市庁舎屋上からのぞむ観光倉敷の舞台裏。
倉敷河畔は午前9時から午後4時まで、車完全規制の歩行者天国になっている。
高山・妻籠・倉敷とも、いまたいへんな観光ブームだが、とくに
山陽新幹線開通直後の倉敷は記録的で、市も対策に頭をなやましている。
- 48 倉敷国際ホテルの街灯と、地下のパーの誘導サイン。
街灯にはホテルのマークが入っている。デザインは浦辺建築事務所。
- 49 倉敷河畔にたつ案内サイン。記号系サインへの配慮が、
公共案内表示物の次元では、実用1点ばかりにとどまっているのが物足りない。
- 50 市が地域保存計画を進めている古い町並みに残る、
市文化財の道標。吉備律下津井標石柱。



48



49



50

伝統の近代化の歴史・倉敷

●倉敷といえばそのイメージは、まず、白壁と黒い瓦の伝統の町並み。そして大原美術館と民芸だろう。これらに象徴されるように倉敷は西洋の美と日本の美、伝統と近代を高い次元で統合した、日本のなかでも異色の、芸術と文化の町として知られている。しかしその一方で倉敷は、瀬戸内臨海コンビナートのしにせ・水島工業地帯をかかえ、大手繊維メーカーの一つ倉敷紡績(現・同社+クラレ)の発生の地でもある、人口35万の近代産業都市である。つまり倉敷はこんどの三つの町のなかでは、いちばん規模も大きく、その性格も複雑な重層性を持った町なのである。

こうした倉敷を考える場合、忘れることのできないのが、倉敷紡績を創始したこの地の豪商の末・大原家、とくにその2代の傑物と謳われた大原孫三郎・総一郎父子の遺産だろう。日本の実業界でも特異な存在として一目置かれていたこの両氏の、高い見識と郷土愛に貫かれた指導力と、両氏をめぐる芸術家グループの手で、すでにほぼ半世紀にもおよぼうとする年月をかけて、文字どおり形づくられてきたのが芸術と文化の町・倉敷だった。

●日本の民間美術施設の草分けである大原美術館が、孫三郎氏のコレクションを公開して設立されたのが昭和5年。今も日本最高の美術コレクションの一つといわれ、当時としてはまさに奇跡的だったこの美術館は、全国的美術愛好者のメッカとなり、戦前の暗い谷間の時代に文化の灯をともした。しかし現本館のその建物は、当時の時代思潮を反映しルネサンス風の歴史様式建築で、いまとなれば倉敷のなかではやや異質である。これに対して柳宗悦氏の民芸運動との孫三郎氏らしい結びつきは、総一郎氏の代になって、伝統の米倉を内部改装して利用するというアイデアの民芸館を生んだ。戦後も早々の昭和24年である。続いて翌25年には、「まかねふく」吉備路の古代文化を紹介する考古館も、同じ方式で開設された。

20年代初期というあの価値逆転の変動期に、このような事業が行われたというのは、たいへんな先見の明でもあれば、総一郎氏を中心に結集した人々の倉敷の伝統の美を守り抜こうとする、強い決意も読みとれるように思う。と同時にこれは今日の保存と開発問題の基本原則を、時代に先駆けてまったく独自に開拓したものでもあった。その後同じ方式が、美術館別館をはじめとする一連の倉屋敷や、元倉紡原綿倉庫(現倉紡記念館)・元町役場(現倉敷館・市営案内所)などの明治・大正建築にも適用されていく。

このようにして形づくられてきた倉敷が、観光的にも発展しはじめたのは30年代以降である。そして38年には、国際的観光時代を再び先取りして倉敷国際ホテルが建った。当時で人口20万の地方中都市が国際級のホテルをもつということは全く異例のできごとで、その意味でもまた倉敷の環境によく調和した現代建築という意味でも、このホテルは高く評価された。設計は関西建築界の重鎮・浦辺鎮太郎氏。氏が長年、大原総一郎氏のよきパートナーとして、倉敷の環境づくりに尽力されてきたことは、建築界では有名な話である。

●いまの倉敷川界わいは、こうした先覚者たちの業績を核として、さらにより広い市民層の努力の集積と、市の協力態勢のもとに維持管理されている、倉敷市民共有の貴重な財産である。SDA賞が、そういう市民の総意の代表者としての市長・大山茂樹氏に贈呈された

ことは前記のとおり。そこで市をまず訪問して、観光課長・州協滋氏に、保存行政上の苦心談をいろいろとうかがった。

現在倉敷河畔は市の特別美観地区に指定され、44年度から保護条例が施行されている。そのなかには橋や柳や石階など市指定の文化財保護や、建物外観の大きい変更を禁じる建築協定、屋外広告規制条例などが含まれる。この条例により外観復原の際には希望すれば市の補助が受けられるのだが、その申出はほとんどなく大部分が自費改修。また屋外広告は規制できても個々の商店看板にまでは強制力はなく、市民の良識しだいということになるが、「大部分の方がよく理解し、協力してもらえています。やはり市民の皆さんのもり上がった力があったから、現在の町並みができたんです。」

ただ倉敷の場合、その伝統の近代化方式がかつては文化施設中心だったのが、観光ブーム以後の今は商業施設中心に動いている。そこにいろいろと難しい問題も伏在しているようで、市もあの辺りが確かに「ちょっときれいになりすぎた。」ことを認めていた。これでは逆に観光客が、古い町並みというイメージにそむかれることもあるだろう。「その辺が目下の課題です。」——その市はいま倉敷河畔外周地区の保存問題にもり出している。いまや倉敷川の一面はここだけに集中する観光客ですでに過飽和状態。その広域分散の狙いとともに、市域を保存地区・再開発地区に分けて、産業都市・倉敷の明日の課題にそなえようとする構想が含まれるものである。そのためにいま市の手で、同地区の重要な民家建築についての調査作業が開始されている。その調査カードをはじめ、保存行政上の資料類がよくととのっているあたりも、さすが先駆者・倉敷のキャリア十分とみえた。最後に市は、「倉敷にはもっと広い地域に、皆さんにみていただける歴史的な建物と町並みが残っている。その辺の理解を拡げてほしい。」ともう1度強調していた。

●ところで次に、浦辺建築事務所の辻野純徳氏にお目にかかって、ここへきて倉敷が直面している。かなり深刻な状況を知ることができた。氏はいう。「倉敷というのは現在まで作り続けられてきた町。しかもひじょうに高い質で維持されてきた。それは大原家とそれを巡る文化人たちの力によることが大である。」しかし、それが最近の商業化現象進行のなかで、内部から崩壊しかかっているという。つまり内部改造方式の波及の結果、その質も落ちたが、とくにすぐれた民家建築の、単体としての凍結保存問題までがその大勢に押し流されてゆく。建築条例で外観変更の場合には審査会の手でチェックすることになっているが、内部変更までは規制できない。すでに倉敷本来の倉屋敷といえる商家はほとんど残らなかった。「倉敷には生活があるから減びないとよくいわれるけれど、今のままではなにかみがヌケガラとなり、白い壁と黒い瓦のシエルだけの、文字どおりのサイン建築になってしまう。まさにSDA賞にふさわしい。」…という、これは意外に皮肉な結果となってしまった。

やはり大原総一郎氏を惜しい若さで失ってから、これまで倉敷の伝統の近代化問題を支えてきた高い指導理念にも、風化の影がしのびよってきたということだろうか。辻野氏の危機感は、倉敷を愛する一外部者にとってもヨソごとではない。それでいうと倉敷は、いま妻籠が迎えているような、保存と開発の第1段階を先駆的に通過しただけに、いち早くより困難な第2段階にさしかかった町のような。そこを再びパイオニア的に乗り切るために、改めて長年倉敷とはゆかりの深い浦辺鎮太郎氏を、市のタウン・デザイン・ディレクターに任命されてはどうか、とこれは浜口隆一氏の提案である。

〈サイン環境〉の思想をめぐる

●今回は以上のように、〈サイン環境〉という新しい概念が登場し、高山・妻籠・倉敷の三つの町を表彰する運びとなった。これは今までにない試みであるが、実は〈サイン環境〉という概念の巾がきわめて広く、多様な解釈を許すために、審査会でもその問題をめぐって議論が湧いた。また用語自体も、〈サイン環境〉なのか〈環境サイン〉であるのかまだごく流動的な段階である。しかしともあれその第1回の試みとして、これらの三つの町、その歴史的環境保存地区とそこでのサイン問題が選ばれたことは、個々の見解の差をこえた、SDAとしての共通の問題意識を示すものといえるだろう。では、〈サイン環境〉とは何か。これについて審査員代表として、以下の3氏の見解をご紹介します結びとする。

●まずこの問題の、最初の提案者である鎌田経世委員から。

「実は審査会のためにサインの写真を写して歩いているうちに、1個や2個の単体サインで、いくらいいものがあったてもあまり意味がない。それよりむしろ一つの環境として統一感のあるところに、群としてのサインが現われていたら、そのほうの意味が大きいのではないかと考えた。それが古いか新しいかは二の次だが、たまたま今度は古いものばかりになった。新しいものでもいいサイン的環境が出てこなくてはいけない、と思うけれども、いままでだいたい味気ない、四角四面の統一看板ばかりだ。

ヨーロッパに行ってみて感心したけれど、ヨーロッパでは古い看板のいいものがある町が、新しい看板にもいいものがある。しかし日本の場合はその間が切れている。それは日本があまりに新しいものを求めて突っ走った結果だし、そのため生活空間が貧しくなったことともつながっている。ただし僕は今の、古いものは何でも彼でも残してゆこうという文化財保護型は、あまり健全ではないと思えて感心しない。また古いものの魅力にとりつかれてしまうことも警戒したい。やはりわれわれは、新しい、いいものを作らなくてはと思う。しかし新しいものがまだいろいろな意味で、古いものにおよばないことも事実だ。そういう近代の難しさというものを考えてみるためにも、今度のテーマは意味があるだろう。」

●次に大平恵一事務局長の寄稿を要約する。

「サイン・デザインをサインの単体でとりあげ論じては無意味である。それは環境としてとらえられ、メディアとしての角度から考えられなくてはならない。伊藤ていじは《建築は単体としてではなく群として企画されなくてはならないと主張されてきて久しいが、今や個々の建築だけをとりあげてその価値を論じて、無意味な場合が多くなりつつある。》(71・12・24・朝日) といっているが、これはサインについてもそのままあてはまる。集落全体がかもしだすサイン機能、群をひつくるめたシンボル性。そのようなとらえ方をしなくてはならないところまで行きついたという感じである。〈サイン建築〉という造語をしたときくらい、その発想の延長上に〈サイン環境〉のイメージは予見されていたといえる。

——妻籠について仁木てつは、《それを実現した人が、いまあるがままにあらうと考えたとたん可能になった〈環境創造〉であった。つまり何か外在的な力につき動かされた結果ではなく、自分自身であらうとしたこと。いわば自己の〈メディア化〉を行ったところか

ら出てきた。》(72・3・宣伝会議) とのべ いる。

田中滋夫(黒川紀章都市建築研究所)は、〈高山のアーバン・デザイン〉で、タウン・スケープの調査から出発した。それを心の中に含んで視覚的な全体計画を作り、そのイメージ・スケッチにもとづく空間構成計画を提案した。彼はそのスケッチの中に〈古い町の芯〉として、上三之町のディストリクトをとり入れている。これはわれわれのとりあげた、高山のもつともサイン的な環境である。

——昨年SDAは、〈環境的生態的視野へのプロローグ〉をとたえ今年、〈サイン環境〉の造語による新概念を提示した。環境的視野、エコロジカルな視野へという方向はあやまりではないと思う。ただその移行がせっかちであるかどうかは議論のわかれるところである。しかし現在、世界の変革のテンポは早い。そのなかで意識革命も急速に進行している。チャールズ・A・ライクが〈The greening of America〉で、科学・技術・組織・能率・階層性の支配する管理国家での意識Ⅱから、すべての人間存在の絶対的価値を肯定する意識Ⅲへの、脱皮の実態を解剖してみせたように……。

もっとも、せっかちにこの方向をとろうとすれば、クライアントとの関係にひびく、という懸念は当然あるだろう。しかしそのために主張を曲げるとすれば、公害問題に目をつぶる労働組合と同じことになる。それでは本物の運動はできない。」

●最後に、浜口隆一氏。

「こんどはたまたま〈サイン環境〉というテーマが、古い町並みを対象にしたので必然的に文化財保存問題と結びついた。そのため審査員にもかなり混乱がみられたようだし、外部からもいろいろと異論や疑問も出た。たとえばSDAが文化財保存に一辺に走ってしまうのはどうかとか、個々の建物や環境まで含めてサインとみるのはサインの拡大解釈だ。あるいは一方でサイン公害の加担者でありながら、こういうものを表彰するのは自己矛盾ではないか……など。

たしかにいきなり〈サイン環境〉といっても、環境というひじょうに巾の広い問題に直結してゆくだけに、わかりにくいのは当然でSDAとしても勇み足は警戒しながら、理論的にも固めてゆかなくてはならないだろう。しかし基本的には、サインというものも環境のなかで考えられなくてはならない時代がきた、ということである。それでいうとこんどの賞の三つの町は、いわば環境とサインの調和という問題の生きた古典である。それが環境保全に努力している人々の、たいへんな意志力のなかで維持されている点でも教えられる。

ただしその一方ではやはり、現代の文明環境のなかでの屋外広告の問題も否定するわけにはいかないと思う。私はだいたいサインの記号系情報機能というものを、町の上空で目立たせるべきではないと思っている。その意味でネオン・サインなどには批判的なのだがそうとばかりもいえないのは、最近超高層ビルの最上階からという視角が登場してきたことだ。たとえば京王プラザあたりから見おろしたとき、新宿の繁華街のネオンが光の海のように拡がる。そしてそのそれぞれが情報を送る灯だ——という。あの光景はわるくない。これも1つの現代の、ダイナミックな〈サイン環境〉である。

いままでネオンは通りから見るものだった上に、企業が短サイクルで息せき切っているのも、サイン公害などもおきた。むしろ高いところから見おろすものと考え、都市美へのご献灯という意識をもつとすれば、媒体の性質も変わり、もっとよくなる可能性もあると思う。いずれにしろ〈サイン環境〉というテーマはこんどが第1回だし、次の展開を待ちたい。」